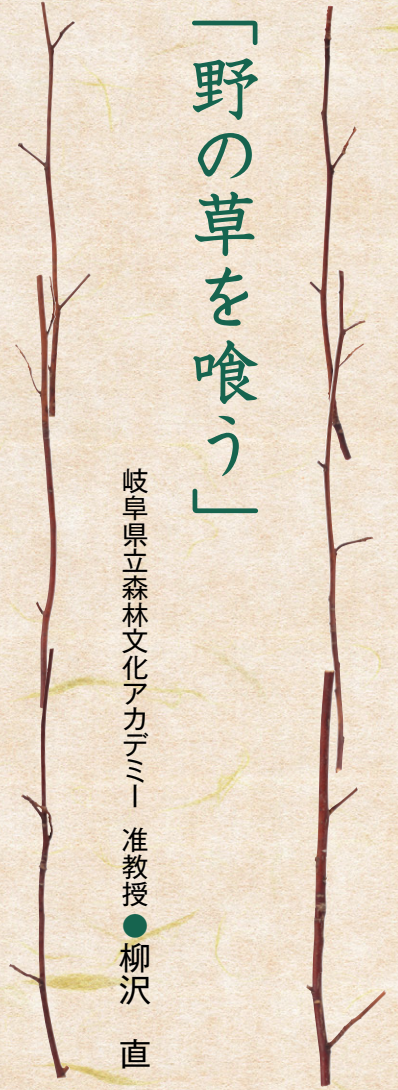


「野の草を喰う」

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 柳沢 直



い食料の供給が必要です。食料・エネルギーの自給のために、これからは地方の役割がますます重要になるからです。

で、冒頭の野草の話ですが、経済が崩壊してお金で食料が買えなくなったとき、生きて行くための基本である食料を調達できるのは身のまわりの自然（耕作地や森林も含む）から、ということになります。すると、食べられる山野草を見分けたり、山野草が生えるような自然を維持する仕組みを知ることも重要になってきます。

山や野の草を食べる暮らしは貧しい暮らしなのでしょう。それとも自然の恵みに感謝して生きる人間本来の豊かな暮らしなのでしょう。大袈裟かもしれませんが、日本の将来のためにもう一度価値観を根底から考え直す必要があるのかもしれない。

この原稿を執筆しているのは4月です。あたりは一面の新緑で、森林文化アカデミーに入学した新入生のようにキラキラと輝いています。この季節、春は駆け足で通り過ぎていきます。それは短い期間ですが、多くの山菜の旬の季節とも重なります。そんな中、森とは少し離れますが、身近な野草を摘みながら考えたことがあります。

今の世の中、食べ物には食材も含めてスーパーで買ってくるのが当たり前。これは高度に分業が進んだ文明社会に我々が暮らしているからで、そのおかげで効率よく食料が生産できるし、消費者は最低限の労働で食料を手に入れることができるわけです。しかし、直接建物が倒壊したり津波に襲われたわけでもないのに、3・11の震災のときには短い期間であれ、首都圏で流通がストップしてお店に食料品が並ばない状況が生まれました。こういったとき、「生きる」ことに必要なあらゆる要素を他人任せに行っていることを現代人は

否応なしに自覚させられたのではないのでしょうか。

明日いきなり食べ物を買うことができなくなったら、あなたはどおしますか？ 経済が崩壊して手持ちのお金が紙くず同然になり、お店に品物が並んでいても買うことができない、そんな状況は起きつこない、と決めつけるのは希望的観測にすぎないのかもしれない。日本経済は好況への兆しを見せていますが、国の財務状態は決して良くなっていくとは言えません。近くて遠い隣の国、ロシアでは1998年に財政危機が起きました。その翌年、ウラジオストクの友人を訪ねました。彼女は国立の研究機関の研究者でしたが、給料は何ヶ月も支払われず、肉を買うお金もないとのことでした。

このような話題で思い浮かぶのは、戦後すぐの日本の状況です。慢性的な食料不足の中、消費者である都市住民は、闇市で高いお金を払って食料を手に入れるか、地方に買い出しに行つて

衣類や貴重品と引き替えにして、何とか食料を手に入れていました。そして煮炊きやお風呂に使うエネルギーである燃料も、都市では手に入らないので周辺や遠くの山で生産される薪や炭に依存していました。極論かもしれませんが、その当時は都市の住民の方が地方の住民よりも貧しい暮らしをしていたと言えます。ところが現代では多くの人は食料やエネルギーを手に入れるのにお金が必要で、お金を稼ぐ仕事は都市に集中しています。豊かなのは都市の住民ということになっているのです。戦後しばらくの時代と比較すると、現代では都市と地方の関係が逆転しているわけです。

ですが、否が応でも経済の成長を迫られる、現在の資本主義経済の仕組みが行き詰まり崩壊したとき、都市と地方の関係は再び逆転するはず。新しい持続可能な社会を目指すには、原発や輸入燃料に頼らないエネルギー供給の仕組み、外国からの輸入に頼らな



道ばたで摘んだノヂシャでおひたしを